

歴史と民俗文化のふるさと

—— 山口市徳地の語り部・赤木森さん大いに語る (二) ——

安 溪 遊 地

Yuji ANKEI

安 溪 貴 子

Takako ANKEI

はじめに

二〇〇五年一月三〇日、山口市徳地の郷土史・民俗研究家の赤木森（あかぎ・はやし）さんが亡くなられました。ご病気のため、入院をくりかえしながらも、寒くなる前に、家のまわりのことを片付けておきたい、あとは、家に入って書いた物の仕上げをしたいとおっしゃって、家のへいの修理やペンキの塗り直しなどをしておられたとのことです。

しかし、再入院からわずか一週間ほどで、赤木さんは逝ってしまいました。徳地の伝承を語り始めると、六時間や八時間ぐらいいは休みなく話が続くという希有な語り部であられただけに、惜しまれてなりません。まだまだ書き残していただきたいものを多く持つておられた方でもありました。奥様からうかがったところでは、段ボール箱に何杯もの原稿を書いておられたということです。

私どもが赤木さんから直接にお聞きした、自然や動物についての言い伝え、重源上人の足跡をたどる巡検の記録に加えて、書き残された

原稿や下書きの一部をご紹介して、郷土の偉大な語り部を偲びたいと思います（写真上）。

昨年この紀要に発表した前編や、二〇〇四年に発表した『やまぐちは日本一』（弦書房）と併せてお読みいただければ幸いです。

徳地では、二〇〇六年の秋、「徳地づくり達人塾」という地域興しのためのとりくみの中で、役場（現在の総合支所）のある堀地区の北の、小古祖（おごそ）地区のフィールドワークを行ない、地域の文化財を書き入れた、わかりやすいカラー案内図を作成しました（<http://tokudi.jp>）。赤木さんの語りの中には、小古祖の伝承も含まれています。地図と伝承をセットにして作成していくという取り組みが今後できれば、他地域との交流のために、地域の伝承を生かす道のひとつが見えてくるのではないかと期待しています。

第一部 赤木さんと訪ねる徳地の歴史

「徳地の歴史を訪ねたいのなら三日はかかります」と赤木さんにいわれていた。二〇〇四年二月二九日の二回目の訪問では赤木さんは私

どもを車に乗せてくださり、ご自身で運転しながらていねいに案内をしてくださった。以下はその訪問記である。

堀あたりは交通の要所

役場のある、堀のこのへんは、島地川の本流と佐波川の本流がであうところだ。ここには要害岳があり、あたりに亀の甲のように山々が連なっていて、その一面に観音堂がありました。

ここは、周南・周北の道、石州から来て荷卸し峠を経て長門への道が交わる、へそのような場所です。つまり、軍事的にどこにも一日で兵を移動できるというところですね。兵を動かしても、山陽のようにめだつこともないし、佐波川沿いに上流にたどりましょう。

ここにあつたのが、川が湾曲して取り残された大きな三日月淵です。私が社協（社会福祉協議会）にいたとき、空中写真をとらせたことがあります。

才契の集落にて

ここは、才契（さいちぎり）です。もともと才谷という村だったんですが、重源上人が東大寺再建に使う材木を流すために、川を付け替えました。そのために本村からちぎれたので、こういう名前になったんです。当時は十二軒の村だったそうです。

このように、川が大きく曲がっている場所では、川をせき止めて水位を上げるためのダムである関水（せきみず）も、たくさんつくらないと木が流せません。普通の集落は、ひとつかせいぜい二つの関水が担当ですが、ここ才契は川の曲がるところにあるので、関がせまい間隔で並んでいます。だからたくさんさんの仕事を担当させられて、その分負担も大きかったんです。また、全国から労働者が来ていたのですが、関のめんどろを見るのに才契だけは地元の人でなければわからない

かったといえます。

才契のお祭りは八百二十年続いてきた

ここで、年に二回、春と秋の彼岸に祭をやりまします。この村でトウヤを決めて、山のお堂から弘法大師さんを家に連れて帰られて家でお祭りをします。その日は、山で直径十五センチ以上もある大きな竹を切ってきて、竹筒を抜いて長さ七寸、太さ三寸ほどのものに寿司をつめた「かつほ寿司」というものを作って、各戸に一本ずつ振る舞います。みんなで一戸あたり米一升を炊いてげんこつぐらいのまん丸いおにぎりも握ります。それを食べてからお祭りし、お念仏してから山に送り返します。それだけの量を今の人は食べ切れませんけれど、昔は食べる人もあつたわけです。来年（二〇〇五年）が重源上人の没後八百年祭ですから、少なくとも八百二十年はたつた祭りです。

三谷の木地屋の石垣

支流の三谷川です。三谷という村は重源さんの用材伐り出しの拠点でした。雨が降ると土石流が発生して川が浅くなっています。ここは「布団を川に干す所」と言われます。それは伏流になっていて水は地下水になりはるか下の方を流れているからです。

このの棚田の石組みはなんともいえず美しいでしょう（写真2、石垣と聖岩）。この積み方は歴史的には古く、横組みとかこは積みとか言い、すばらしいものです。ここでは、棚田が崩れたら人家も崩れまします。人も死にます。ですから「絶対に」崩れてはいけない、崩れない技術です。石垣のひとつひとつがダムの役目をしています。菅笠をとりあげたら、その下に田が三枚あつたとか、赤牛をおこしたら、その下に田が何枚あつたとか、そういうたとえ話が伝わっているほど、小さい棚田が多いんです。小さな田に水路をつけたら稲を植える面積が

なくなりやすから、それらをすべて暗渠にしてあるというすごい技術なんです。桃の木のここのら辺なんかすばらしいものだったのに、それを文化材にもしないで、コンクリートで補修したりしてしまうんです。時代が下がると棚田の石垣が横に長い石を重ねるようになってきます。これは、牛や馬にひかせる鋤の先が木でできていたから、石にひつかかってそれが折れるのを防ぐためでした。

棚田は小さい方がいいのです。水がない年にはいくつかの田を犠牲にしてひとつの田をつくれれば狭い田で米がつくれます。いまのようにやたら広い田にしてしまうと、水がない年にはどうにもなりません。

国木の板落とし

三谷川のさらに支流の北谷川を奥へとたどってきますと、ここから見えている斜面のあの一角は木が生えていないでしょう。かつてろろで用材を次々と引きずり出したために今でも木が生えてきません。ここで写真を撮るときは、雪が残っている時がいいですよ。そこだけ真つ白くなるのでよくわかります。あとであの向こう側へ回りましょう。

仏埵からろろが浴へ

仏埵（ほとけだお）と読みます（写真3）。ここから向こうは島根県になるんです。「昭和四十三年林道開通」という石碑が建っています。

仏埵の徳地よりには佐波川の源流がいくつもあります。銀マスという昔の鱒がいるはず（写真4）。

左岸のけわしい四郎谷。これは別名往生谷ともいい、年寄りを捨てたところと伝えられています。突き落とすんです。何度もあったことではなく、一度か二度と思いますが、おいて帰ればお年寄りの方が早

くもどつてくるでしょう。

ろろろが浴（えき）というところ。大村益次郎が四境戦争のときに砲台をすえたところです。

五月五日には由緒あるお祭りが二か所あります

五月五日には、梶畑の袈裟岩のお祭りと、月輪寺でお祭りがあります。お客さんが全国から来られます（写真5）。重源さんの師の法然さんが岡山なので、岡山からの訪問者も多いです。梶畑はいま三軒しかないのに、その日は人がいっぱいになります。五月五日の袈裟岩様のお祭りには、こちらでおむすびをつくって接待をします。もう二十年ほど前になりますが、手桶に山の幸のおごちそうを盛ってだされたのを覚えています。

滑も家が減りました。一人暮らしの人が最近二人亡くなりました。梶畑の人たちは、高齢なのに、桃の木へ行く道を三軒で守っています。道の草刈りが大変です。私も草刈機を持って刈りに行きます。昔の者は銭をもろうてやるということはない。何かやったら金にかえるというのはうれしゅうないんです。皆がよろこんでくれる方がよほどうれしい。若い衆は勤労奉仕するものだったですから。

七はぎの着物

徳地では、子どもが生まれてもうまく育たないことが続くと、一度この子を捨てて、拾ってもらおうということをすると言われています。その時に、近所の七軒の家からもらったハンカチほどの大きさの布を接ぎ合わせてつくった着物を着せて捨てるんです。梶畑の女性が、自分はそのうして拾われたという経験をしておられて、それと捨てられたときに来ていたナナハギの着物を現にもっておられるんですよ。あとで、お話をうかがいに行きましょう（写真6）。捨てるとき

は、山の神さんの前に捨てるんです。古い家で、山の中に小さなほらがあります。もちろん、うちあわせておいて、すぐに捨てるらうんです。

重源さんが泊まった家

この近くに、重源さんが泊まれたという古い家がありました。柱間が広かったり狭かったりする面白い造りの家でしたが、惜しいことに火事で焼けました。お世話になったからというので、重源さんがお経を三巻置いていかれたのですが、それは火事の時にも救い出して、今は防府に出ておられるからそちらに持つておられるでしょう。

梶畑の家も百二十年余りたっていますが、雨漏りさえせんければあと百年ぐらいいはもちます。でも、茅葺きだし、家の守りには困るですね。

材木を出したときの太いロープが梶畑のアマにあげてありましたから、今も放つておく骨董屋がとっていつてしまいますから。

三本杉の下で

ノシデトリヨウブの合体木というのがあります。ヤマノカミサマと地元では呼んでいます。今では大きな木になっていますが、これもともと、高齢の重源上人の手すりとして細い木をねじって、編みあわせたものがもとです。(写真7)

重源上人は、聖でしたから、そのネットワークで、日本中の情報があつていました。岸氏の系統でもあります。岸氏というのは、飛鳥の朝廷の食糧供給の担当者だったんです。この岸氏の財力をもってしてはじめて重源上人は、三度も中国にわたることもできたのでしょう。

重源上人は、出家して醍醐寺を修理しました。これは、村上源氏の菩提寺ですから、瀬戸内海で海賊に木材を横取りされないように、村上水軍にもたのんだんですよ。

重源上人は、神戸港、芦屋港、明石港の港の改修をみなやっています。

年に何回か、気候のいいときに瀬戸内海を筏で横断するわけです。瀬戸には船が沈んでいるので、その改修に、山で使ったのと匹敵する予算をかけていると思います。

重源は栄西と仲がよく、栄西が博多の筑前に誓願寺をつくったとき、すでに周防柚が九十一本の木をきりだしています。重源さんはそのことがちゃんと頭の中にあるんです。

当時、伊勢神宮の森を使おうと思つたら、神宮で必要と断られましたが、実は材が小さかったんです。人脈を思うようにつかうことができました。

陳和卿(チンナケイ)という外国人が港にはいったのを察知して、大仏の首のあげたのをなおすことを依頼するとか。高野山にいてもたちまち情報が入ってくるのは、聖集団を掌握していた重源さんの力でしょう。

奥州の金で鍍金するための使者を引き受けたのが西行です。それでもいちおう頼朝にあつて、承諾を得ています。

重源上人は大勧進ですから、なんでもできます。すべての資源が使えるわけです。自分の給料がないだけです。五戸からひとりずつ毎日出るといふ形で労働力も集めました。東大寺の再建という国家プロジェクトだったんですね。

頼朝としては、平家を倒したところでしたから、東大寺の落成で平家の世の終わりを天下にしらしめたい、という下心があります。それで、後白河上皇に協力しました。頼朝と仲の悪かった奥州平泉の金も

西行法師が間にはいつてうまく利用しています。

——袈裟岩様の所にあつた七百年忌の卒塔婆には「俊乗坊」と書かれてありましたが。

俊乗房、以前は「坊」の字だったんですけど、東大寺に問い合わせたら、研究室というような意味で、「房」を使うと教えられて、徳地ではこれに統一しました。

袈裟岩さまの祭では、俊乗という言葉さえ遠慮して「房上人様」と呼びます。

木の伐り出しが完了した場所

ソウノセという場所です。木の伐り出し作業が終了しました。綱も滑車もそこへ置いた。私のおやじはその滑車をもらつてきて、一輪車を二つ三つつくつたんです。この一輪車は田の畦なんかでも自由に使えるといつて人気があり、家にあることはめつたになつたんです。太い綱はそのまま腐りました。愛宕さんという家の畑で、これが、伐採が上徳地から始まつて下徳地でおわつたという印です。

ロープの原料の麻苧が不作で、頼朝と後白河上皇が全国によびかけようやく確保してつくつたロープだったんです。

第二部 徳地の民俗あれこれ

新年の祝い方

新年に若水を汲むときは、二尺降りて三勺半汲みます。お金が上へ向いて流れているというから。若水は父が汲みました。

門松も串地区ではフクラシ（和名ソヨゴ）を飾ります。ふつくらとしたおいしいお米がとれますように、という願いです。滑ではクリ

を飾り、クリのようにおいしいお米をといいます。

滑では正月の若水汲みの時にネコヤナギを折つてきて、芽のつきぐあいとその年の天候を予想して、早物を植えるか、遅物を植えるかを決めるということがあります。串では雪の融けぐあいを見てその年の作付けを決めています。正月の二日にはその年の作付けの準備を考へ始めます。

二日は仕事始めとして男は牛の縄をなつたりしました。

タラの木のこと

節分には、いわしの頭と髪の毛をやって、ダラ（和名タラ）をたてて……。ダラの木の芽は、その下に立つて拍手したら落ちるですよ。小古祖の人はたいていそうしています。一緒にいつたのが、神社の太夫さんじゃつたから拍手がうまいかと思つたら、そうでないんです。あれだけとげがあつたら、触られませんかでしょう。ところが最近の町の人は、すっかり切つてしまふんです。するとせつかくのタラの木が枯れてしまいます。

町の人はダラだけでなく、フキでもワラビでもゼンマイでも皆採つていつてしまうので、なくなつてしまいます。だから私はダラを植えました。

ダラをへびよけに鶏小屋に入れます。アオダイショウが入つてきて、鶏の首にまきついて殺しますから。アオダイショウをダラで追い払つたんです。すると来なかつたです。

水争い

田は上流から順番に植えてこないと、水漏れがして水が下の田まで来ません。これはかりは、金があつてもどうにもならない道理です。

下の者が自分の田に入れようと水を堰いても、上の田の主が植えん

と干(ひ)るいね。そして、水争いして口論する間でも、鍬をあてて水を堰いておかんといいいます。

干ばつのひどい年には佐波川の本流でも淵にしか水がないようなこともありました。一本のローソクの火が点いている間だけ、それが消えるまでだけ水をあてるという水の配り方もありました。才谷の村では水争いから大喧嘩になって、役人がそれを整理して水を配るようにするという事件が起こっています。

産まざる竹

嫁に来て子ができないことがあります。しかし、このままでは村の人口が減って村が建たんようになるから「ふ(運)」が悪いというんです。これは、家に置いちゃいけないということになる。そういう嫁は、居り場を変えてくれ、と言われることになりました。もちろん、すぐに生まれなくても五年や七年は待つわけですが。そうなったら、上流の家の嫁は下流の方に小屋をつくってもらってそこで寝起きします。そういう女は山に竹を植えるということをさせられます。これを「産まざる竹」と言います。傾斜地の土砂崩れの所に竹を植えさせるんです。太さ一寸くらいの細い竹でも、根っこが大きいから、米の一俵よりも重いです。これを植える日は旧の七月二十何日と決まっています、今の八月です。これから一番暑いときです。掘るのは人にやってもらっても植えるのは自分でやらないといけません。女手でそんな苦勞をしているところを見るに忍びんからこの日は山にいくな、と父がいいよったです。

姨捨ての話

食うに困って、凶作の年に年寄りをすてたという話が伝わっている村があちこちにあります。ある年二年も三年も水害や干ばつが続いて、

とうとう年寄りを捨てんとうどうにもならんことになりました。該当者が二人、どちらも女性でした。雨露を防ぐだけの小屋を人が山の中に建ててくれた。ところが、片方が金持ちのばあちゃん、その人がもう片方が貧乏なのを知って、「あの貧乏人のばあさまと一緒にいやでございます」というてジラ(わがまま)をいうた。それで別々に捨てることにして、このばあさまは、深谷と三谷の境界に捨てることになりました。

もうひとり、気のいい人で「はあ、私はこの年ですすからどこでも結構であります」と言いましたから、タカノス山の山の上の景色のいい、山々がみとおせる所に捨てました。捨てるときには、二、三日は食べるほどはおにぎりを持たせるんです。この人の家は貧乏で苦労しているから、ようできた嫁さんがおって、少しでもひもじくないようにと枕の中へソバやダイズの粉を入れて持たせる計画でした。歯磨き粉や鏡も持たせたんですが、当日あせて粉のものを詰めるのを忘れて、蕎麦などを丸のまま入れて渡したそうです。山の上にあがってみると、岩の間に草がまだ青々としていて、石の間をせせりよつたら、きちきち水が出てきて、一日にバケツ一杯ぐらいたまつたそうです。そこへ蕎麦を蒔けば小さい畑になりました。そして、鏡をのぞいていたら、鷹が大きなウサギをつかんで通りかかった所へ鏡の光が目に入ったんでしよう、大きなウサギを落とすくれました。

ジラをいうたやねこい(面倒な)方のおばあちゃんは、食べ物ですぐなくなつて、もう一人のおばあちゃんのところへ上がってきました。そこには、畑もある、ウサギもあるというて、二人で喜んで大声で歌を歌っていたところへ、見に来た若い者たちは、年寄りの知恵に驚いて連れてもどつたということでした。

栗と焼き米

昔は営林署に届けて国有林の中で山栗を拾って、これを干してからはたいたものを三つに分けました。丸太(丸のまま)と半分と小さく砕けたものです。栗の丸太はとって置いて、割り栗から食べました。昔は悪いものから、古いものから食べたんですね。小さく砕けたのはヒライコメとあわせてちよつと煮るとおいしくなります。このヒライコメと割り栗のミックスせたのをご飯の上にたらつとかけて食べたら、香ばしくもある、甘くもなつておいしいです。

ヒライコメの食べ方は、それだけでは食べにくいから、お茶をかけて、親らは塩味で。子どもは砂糖味。お茶をかけてなんどかお茶を飲むとやがて米もふやけるのでそれを食べるんです。

米をケシネという

羽釜がない昔は大変だったと思います。鍋ではご飯があまりうまく炊けません。羽釜ができて、あれは一種の圧力釜ですから、ご飯がおいしくなつたんです。

親父は、米を「ケシネ」といっていました。ケ、というのは、万葉にも出てくる食器「御器」のことでしょうか。弁当箱を「ごけ」とか「しき」とか言いましたから。

小米餅

米は供出・販売したあと、一年分の保有米を保存します。良い米は出しますから、しいなや割米などの、篩いからこぼれた小米がのこります。これを捨てるよりはなんとかして食べられればいいと考えるんです。米を食べるといってもまっ白く炊いたご飯ばかりではないんですよ。小米は小米餅にして食べました。白米のちゃんとした餅を食べる機会が少なく、小米餅が多かつたんですね。

まず小米を炊いたら、これを搗いて長い形にまるめて藁を敷いた上において、大きさは直径七、八センチぐらいでしたから、ちょうど大根を切るような感じで、二、三センチの厚さに切つて並べます。小米餅は、色が黒っぽいし、冷えるとすぐ堅くなつてあまりおいしいものではないんです。

醤油は贅沢品

稲と麦の二毛作をしていました。私が小さい頃は味噌・醤油は家で作っていました。醤油はでもお正月くらいしか使わなかつたですね。あとは味噌で味噌つけをしていました。たまに醤油が出ると、「これは醤油か」といって喜ぶほど醤油は使わなかつたですね。やつこ豆腐だけは醤油でないとね。塩は徳地では自給できないので買つてきていました。

赤土入りの団子を食べました

古い茅葺きの家なんかには、リョーボ(標準和名リョウブ)の新芽をとつて蒸したものが保存してありました。俵に入れて天井にあげてありました。これは、食べ物がない時に、赤土の団子にして食べました。採るのはお茶の季節と同じ頃です。この葉が蒸されてやわらかくなつているのを筵の上で小さく刻みます。それを揉んで干して、干し上がったからカマスに入れて、茅葺きの家のいろりの上あたりの乾燥するところに上げて置きました。赤土を山から取つてきて盥の中の水と混ぜると泥が沈みます。この泥を使うんです。かたくり粉をとると同じです。味噌を入れてこれをコウセンのように搔いて、筵の上の刻んだリョーボを入れて団子の形に丸めて焼いて食べます。炊けば土臭いからなかなか食べにくいんで、それで焼いたんでしょね。

お茶は自家製

お茶も家で一年分のお茶を造りました。時季が来ると、仕事を休んでお茶造りに専念します。始めは芽茶、八十八夜のあとは番茶をとり、最後は木を切ってまでして造りました。大家族なら二日も三日もかかりますよ。朝摘んだら午後乾かします。取ったら夕方までには処分しないと、春一番も吹いて散って逃げます。「日常茶飯事」といいいますが、お茶というものは必需品ですから。

昔のひとはたくさん食べた

昔の人は食べるものは今よりよけい食べていましたよ。朝、餅を食べるとすると、ゆがいて黄粉でもつけて若い人は十個もたべました。一家族も十人ぐらいいましたから、一人五個としても、五十個でしょう。大量の餅は、焼くよりゆがくのが速いです。一斗糺に入れて、表に出してあるのを若い人が一斗糺を使って白いの何個、黒いの何個と決めて入れて台所まで持ってくるんです。

紙すき時季は一日七食

紙漉きの家では日に七回は食べたものです。腹にもたれるものを食べていては仕事にならないからでしょう。朝、起きたらまず牛馬に餌を食べさせます。あれらは食べるのに時間がかかりますから。それからまず一口食べます。といっても、冷えたご飯をお茶をかけたほどのものを、茶碗の尻に入れてひとすすり、といった程度のことです。夏なら暗いうちから、女は食事のしかけ、男は田の水まわりをします。牛馬の草刈りは、涼しいうちに一荷刈るのが仕事です。水回りであれば、田には手ぶらで行くものではないとされていますから、肥料など持っていくます。とにかく田圃には一日に何回でも暇さえあれば行きます。一度行けば何か仕事があり、時間もかかるんですが、帰ってきます。

て朝ご飯を食べます。おかゆをたくあん一切れでぐるぐる回して食べるようなことです。十時にお茶。十二時にお昼ご飯。その後昼寝をします。そして寝起き茶として何か食べて、こんどは三時。それから夕ご飯。そして夜の十二時までで残業というか、夜の仕事があるんです。ここで夜食をちよつと食べますが、これが七回目になるでしょう。

カニがおいしい

ちかごろの若い人は、インスタントやらのまずいものをたべていますよ。そこへいくと、例えばカニのつぶしたものの汁。これはうますぎて、三杯飲んだら、夜寝られませんか。カニにしてもウサギにしても、肉ほどはさつと取って食べるほうにまわして、あとは肉を少々残して付けた骨や殻を白で搗いて粉々にします。それに味噌を入れて汁にしたり、団子にしておつゆにいれたり、煎餅にして焼く、こんな風にして全部捨てないで食べるものでした。

カニは高菜を入れて煮さえすればうまいです。冬の寒い時はこれに限ります。

カニは年中とれます。桜が咲くころはあまりおいしくありませんが、このころは川の水量が上がってきて一番獲れる。雨が降って水が増えるころ、長さ一間あるカニモジを手でもって行って、川の瀬に置いて兄貴と二人でめいめい一か所ずつ押さえるんです。川をせくひまもないほど次々にカニが入ります。十五分上のつちよるとカニが五十枚くらいはいっちょる。その時には、四斗樽に三杯とれたです。一杯に四百枚入りますからすごい数です。京都・大阪の料亭に出すのでしよう、一枚十円で買ってくれました。

柿や麦と話す

よその柿をもらいでも、誰もいなくても「ひとつもらいます」という

てから、取るように、という習慣がありましたね。

麦誉めというのもおもしろいですよ。稔った麦を誉めるんです。となりのおばあちゃん、蓑をさかし(裏返し)に着て、麦田に入るんです。異装といえますかね、見られたかつこうじゃない、異様な姿です。そして、「これの麦はようできた。ヨコロ(横槌、槌の子)のような穂になるだろう」というんです。「これの」というのは、この家のという意味です。

担い棒

担い棒。麦を担ぐためのものは、杉でずんどうの形をしています。太くて軽いので肩が痛くない。荷がまわらない。滑りやすい。でも、塩や豆腐や煮干し屋さん、重いものですから、担い棒がしならないと担ぐのがえらいといえます。

米を運ぶには、エゴの木。ピワの木はしなやかで丈夫でいいんですが、なぜかピワを使うのはいやがりますね。

売れる木と薪にもならない木

山へ行ったら、杖にする木も考えて取ってきておれば、売れたものです。マエジヨロー(ちょうな)なんかの曲がった木は、探すのが大変ですから、特によく売れました。

正月餅の餅米をうむす(蒸す)のに、ハイノキを切ってきておやじに叱られたことがあります。火力がないし、灰が火葬場の灰ににいています。まっすぐな木で荷造りもらくなんです、薪にはなりません。

マムシ・青大将・槌の子

それから、山で葛を裂くなどいいます。あれを裂く音でマムシが出て来るんです。一匹出たら、ぞろぞろ出てきますよ。一番多い時は、

一人で二十何匹とつたといっています。

マムシを恐れない人がいます。ポケットに入れたら、おとなしくしているんです。そういう力のある人を「藤原性(ふじわらしょう)」といっています。そういう人がいたというんです。藤原性の人は、左の耳たぶに小さい穴があいています。そういう人が百人に一人はいるものです。私の知り合いでも、毎日青大将を可愛がる人がいました。大きな青大将がきたら、「おお来たか」というて、引き寄せてなでてやると丸くなるので、卵の黄身を飲ませてやっていました。

その人は、山歩きが好きで、シャクナゲを植えています。その下にモグラが穴を掘って困ったので、それへ石油ストープを洗った石油を入れてやったことがあります。そうしたら、槌の子蛇がでてきました。出てきたときは、太さ一寸もない、二尺あまりのもので、なんとすることもな蛇でしたが、この蛇は、驚くと太くなるんです。頭としっぽを残して、小さいコップぐらいの太さになりました。上に黒い模様があつて。獐猛ですよ。縁側においてあるカメラをとろうと思うのに、恐ろしくて目を離せないんです。槌の子蛇は、藤原性の人でもおそろしがつたぐらいですから。私は、声を出して板塀の向こうの女性達を呼んで見せました。その後、引谷あたりでも、枝打ちをしていた女性が自分も見たとかいうて電話がかかってきました。

金鳶と白雉

金色の鳶が出たことがあります。徳地では鳶は棟に止まろうとする、止まらせないように長い竿で追うんですが、田に人糞をまくと、それに鳶が集まって来るんです。その時は、ぴかっと光り、屋根や物干しの影が地面に写るくらいまぶしかったと言っていました。そんなに珍しいものではない、というていました。

——(安溪遊地) 神武天皇の金色の鳶は有名ですが、母が子どもの

ころ習ったといつて教えてくれた「金鳶勲章の歌」というのがあります。(歌う)

一、御弓のはずに 金色の鳶

輝く光 きらきら ぴかぴか

まなこ眩みて 逃げゆく悪者

二、昔の光 今もそのまま

胸の勲章 きらきら ぴかぴか

誉れ輝く 日本軍人

大正時代、徳地で白い雉が見えたことがありました。大化六年に、穴門国(あなとのくに、後の長門国)から献上された白雉によって、年号を換えたと日本書紀に載っているくらい、これはめでたいことだといので、生け捕りにして天皇陛下に献上しようと、在郷軍人たちががんばったことがありました。結局、捕れませんでした。そこからは追われて藤永さんという鉄砲撃ちが撃って捕っていたんです。床の間に白い長い羽が飾ってあったのを私は見ました。

狼の道案内

「送りオオカミ」というたら叱られたことがあります。北谷川のあたりはオオカミの多い所でした。またオオカミを大切にしている所でもあります。オオカミが道案内をしてくれれば心強いんです。とくに雪道に黒い姿はよく見えてありがたいです。オオカミというのはセイが いいといわれています。人間がおしっこするのをまっちょるんです。壺にするおしっこでも、待っていて喜んでなめに来ます。醤油や味噌の汁の余ったのが好きで、待っているともいいます。料理の余ったところとか塩魚の頭なんかもほしがりよかったです。狼が明治の「コ

レラ」でおおかた死んだあとにも昭和のはじめまでオオカミは何度も出たと、昭和の始めまで木挽きをして山で働いた私のおやじが良かったです。

かっぱの教えた膏薬

かっぱは鉄や銅をきらうんでしょう。まぐわが穴にひっかかかって動けなくて、助けてもらったお札に教えたのが、膏薬の作り方です。三谷の膏薬、湯野の膏薬は、かっぱにならったものといっています。

第三部 赤木森さんの原稿から

これは、赤木森さんの残された原稿のほんの一部です。元原稿からの入力にあたっては、山口県立大学国際文化学部学生の中島美帆さんのお力をかりました。また、第一部、第二部との重複もありますが、巡検の部分なので、残しました。

杣の家に生れて

親父も祖父も、ともに杣(そま)でありました。

杣と云っても木挽でしたから他に伐り杣という大木を伐り倒す杣、はつり杣という伐り杣の倒した木の枝や根など伐り取って一本の素材にする杣や、出し杣と云って山から河端まで運送する杣。流し杣と云って川流しする杣などみんな杣と呼び、海でアワビやサザエなどを取る海女に対して山暮で働く人を杣と云ったのです。

親父は家に居るときは(特に積雪で仕事が出来ない冬季)よく色々なことを教えてくれました。小鳥や兎など捕る仕掛け、川魚をとる仕掛けや方法など、地方の子供の撈るとり方とは違う猟法・漁法でした。親父たちは何人か一組で山に入り小屋の生活をしながら何日も家に帰

って来ません。仕事で滑山に入ったときはさすがに大きな木材で、火薬を仕掛けて二つ割り、四つ割りにして木挽作業に入るのだと云っていました。俗に四里八丁(四方)と云われる滑国有林は藩制時代は、毛利氏の御立山として奉行が置かれ厳重な保護管理が行なわれたものだけに、森林鉄道も置かれたものです。

川のほとり

私の家は佐波川のすぐ傍でした。家の前は町通りで私の家は裏道に当る二軒家の一軒でした。

すぐ裏を明神淵と云う佐波川で一、二の大きな淵でした。その淵の入口は初仲坊とよぶ淵で、治承の乱で消失した東大寺再建の用材を伐出しこの川を運送したとき、現場で指揮していた初仲坊の筏がこの淵の岩に激突して溺死したということで坊さんの名前でよばれている淵の一つです。この明神淵には昔から大きな橋はなく、橋桁もないときはみんな瀬を歩いて渡りました。従って田植の時期など女性が渡ることも多く、一人で渡るので溺れても助けをよぶことが出来ませんのでたくさんの方が毎年のように死んだのです。そのため明神を祀ったと云われていますが、これがどこに建てられたのか解らず、私の親父がいつか小社を屋敷内に建てて祀りました。

昭和二十六年七月のキジャ台風で、佐波川沿岸は大被害をうけ、私の家も明神社も流れてしまいました。あとで河原となったそのあたりから明神社の神体らしい土人形のカケラを拾って、現在私の屋敷に祀っております。

明神淵の板橋は長さ五〇六メートル。厚さ六〇七センチ。幅三十〇四十センチメートルの桧の板を渡しただけのものでした。これを架渡してその継目には橋床という水面上メートルぐらいの高さに設定して全二メートルばかりの輪を竹でつくり、ちょうど丸い桶状の枠を川

の中に置いて中に石を積みこんでおく橋台にあたるものです。これを数基造って等間隔に瀬に並べて板橋を渡すのです。

川が増水したときはこの板橋を引いて土手にあげ流されないようにします。この橋床は増水の度に流失するのでその復旧には町内会や、橋の利用者、この橋を渡る田畠の持主や山主などの関係者が出会仕事で行ない、殆んど一日中かかる作業です。

この橋がないということは何も田畑の作業が出来ないということ、出来るだけ橋を流さないようにします。村の人四〇五名を組とした氏名を書いた橋引板の送り廻しで橋を引いたのです。この橋をあまり利用しない町の人たちは、少し雨が降り始めた夕方にもなると、夜の橋引きは大変なのでまだ明るいうちに引いてしまいい、田や畠や山に行っている人は帰れなくなるということがありました。こうした問題から親父が「わしの家が一番川に近いのじゃから、増水して橋板が流れる寸前には俺が責任を持って橋を引くから」といって、出来るだけ日中や田植、収穫の時期など大勢の人たちが利用する頃は特に橋を置くことにしたのです。

終戦後の食糧難の時代、この明神淵の丘に県立農林学校が出来て、この板橋を利用する人が急に多くなりました。

板橋は厚さ六〇七センチで幅は三十七センチか四十七センチ弱で長さは五メートル以上ありました。これを瀬の中に木を竹で編んだものを立て、その中に石を積んで橋床と云う塚を五メートルおきぐらいに据えて、これに橋を渡すのです。ふつう橋から水面まで一メートル位の高さですから少し増水するとすぐに流れるのです。

重いコンニャクを持った人。若い女性など怖くて橋が渡れないので「目をつむりなさい。あとは私が後から首筋のところをつかまえているから」と云っても上下に揺れる狭い橋板は足がすくんで歩けないのです。人は見るなど云っても目の前の流れを見てしまうので自分

の体の流れに逆らって倒れるのです。板橋の上で横に向いて立ち止まられると二人の体重で橋は大きくゆれ、水面近くまでたゆみ、前に回って背負うこともできません。しかも大声で泣かれ出したらもう本当にこちらが泣きたいぐらいです。

中でも私が一番困ったのは、農林学校の校長さんは横綱のような大きな体格で立派な口髯をはやした人でしたが、終列車で着いたから夜中にこうなった、暗いから橋を渡して呉れといわれます。負って渡るに渡れない事はないが橋がもつか、折れはしないかと云うことが心配でした。ところがこの先生は体の割に肝玉が小さくてどうしても体が震えて渡れないのです。押しでも引いてもどうにもなりません。その上、狭い板橋で前を向かずに横向きになっているから余計動きがとれないのです。仕方がないので背負うことにしましたが狭い橋の上では身体を入れ替えることができません。長い竹竿で私の身体を支えながらやっと身かわして前方に廻り背負って渡りました。重い体重で橋は大きく水面にになり、橋はビリビリと音を立てます。それよりも何よりも困ったのは提灯です。柄を口にくわえていると力が沸いてこないような気がするし、横からの提灯の明りは大きな妨げになりました。こうして橋渡しはどうやら終わりましたが、家に戻って熱い風呂に浸って始めて震えが止まったのを覚えています。

何人かで渡るときは溺れても誰か助けを呼んでくれますが、一人のときはそのまま流れてしまうのです。それでも親父が家に居たとき「俺は今までで十回河に入って十一人助けた。それは子供を背負った女の子がいたからだ」と云って表彰されたことを自慢していました。あれからも数人は助けましたし私も二回程助けました。そして長兄も次兄も何回かは救助したと思います。その人達は盆正月、結婚式など餅をつけて持って来たり、親戚以上の付き合いを深めました。そして親父の葬儀にはわざわざ遠路を参列して呉れるなど何か報いられたと

いう温かいものを感じています。

才契の餅なし正月

小古祖村の才契は大きなお腹を突出したように佐波川の流りに沿った小集落です。したがってここを通過するのに四箇所もの関水があるのです。

或る年もおし迫った年の暮、重源上人は自らこの村を廻って河流水の手伝いを要請されました。どこの家でも私の家は今から正月餅を、私の家はこれから輪飾りを、私の家ではこれから門松をと正月迎えの準備に忙しく関水の出仕を断ったのです。それでも上人は「今年正月の餅を食べなくても、輪飾りが無くても、それで不吉なことが起こるようなことは無いように私が祈祷してあげる」ということで村人たちは柱流しを手伝いました。上人は「この東大寺柱は一年に何度かの季節の風や、潮の流れに乗って送出されねばならない。いつでも送出しができるよう準備するものだ。」と説かれたそうです。

あれから何百年たった今日までこの村では重源さんとの約束を固く守り続けお正月には餅を搗かず、門松、輪飾りをしない家があります。とはいえ、そこはしたたかな住民の知恵で、よそで餅を搗けば良いのであって特別な不自由はないということです。

この村は深谷川などから伐出された木材の貯木場であり、木屋番所の番人夫婦の墓があります(写真8)。寝小便に悩む親がお参りします。理由は木屋番こそ夜を徹して見張りするので寝小便の心配はないからというのです。

山口県のへそ

私が住んでいる徳地町は山口県の真ん中にあたるので「山口県の臍」と言われています。

徳地町を流れる佐波川は北は石州（鳥根県）柿木村、西は長州（山口県）の阿武、南は周防（山口県）の徳地町で防、長、石の境界を三州峠、三国峠とよび現在地図の上では仏峠とよんでいます。この仏峠の川上を源流とする佐波川は途中で堀（徳地町の中心地）の尾蔵川で東流の島地川と合流し防府の海に達する延長五十六キロ、山口県第二の大河です。

この佐波川を中心に古代から石見益田に至る街道があり、明治から大正にかけて防府と石見益田の連絡する頭文字を表して防石鉄道が計画されましたが、資金不足とかで結局堀まで開通しあとはバス路線となりました。そして堀から東へ徳山、富田など周南地方と山口、萩への周北道が交差することでこの石州との交通は大いに便利となり陰、陽道としての文化交流が活発化しました。江戸時代の末期には防府からの佐波川通船、島地川から周南の通船事業も藩の直営事業として行なわれたのです。

またこの佐波川上流地域には毛利藩主の廻国道である山代街道が開かれ、縦貫・横断、が更に改良されたのです。文字通り山口県の臍となったのです。

この古代からの陰陽の文化経済の交流の道は塩の道でもありました。大正の初期までは見られた塩買いの人馬の隊列は、今でも年寄りたちの語りぐさになっている一大風物詩だったようです。塩は石州の人に限らず 阿武部、徳地町の各村とも同じ日に合同の塩買いに出かけるので、これを見送る人、指揮をとる人などおびただしい人馬の列が次々と各地で合流し、松明・提灯をかかぎ延々と街道を更新する光景は、今でも目に浮かぶようだと古老の話でした。

塩は、子供が生まれたときは塩売りの商人に名を付けて貰ったら丈夫に育つとか、宿賃も無料だったとか申して、その商人までも特別視されたようです。

こうして仏峠は三州の国境と云うこともあって、そのおびただしい生活物資の運送賃の支払いが行なわれるので峠の広場は大いに賑わったと云うことです。またこれによって隣人同士のような付き合いも多いことから、明治維新の長州討伐で、四境戦争、石州口砲台などが攻撃されたときも あまり大きな戦とはならず不幸中の幸いに終わったことは本当によかったと思っています。

重源上人の徳地杣入り

文治二年（一一八六年）四月十日、重源上人の希望した周防国が大寺造管料国に当てられ当事の周防国社（現代防府市）に下関、国勢の管理を引継ぐと同時に十八日には国庁の役人をはじめ宋人陳和卿、番匠の物部鳥里、桜島国宗らを引連れて佐波川をさかのぼり上流の地で杣始めの式を挙げられました。

そしてこの日を期し上、中、下の三徳地の広大な杣山の各地で東大寺造影用木伐の採取事業が本格化したのです。

『東大寺造立供養記』に、「柱の長さは九丈十寸、或いは七丈八寸（二メートル三十メートル）、口径は五尺四寸五分（一・六メートル）これに轆轤（ろくろ）二帳を使い人夫七十人で柱を押し大綱を引くなり、綱の長さ五十丈（百五十メートル）綱の口径六寸（十八センチ）この綱二筋を柱の元末（両端）に附して引く。もし轆轤がなかりせば即ち千人をしてこれを引かしむ。然るの間、或いは数十丈の溪を埋めて嶮難を平げ、或いは高大な盤石を砕いて山路を開くとし、大木あるとも好木は得難く 数百本を切ると雖もわずかに十十二本を得るの所以は樹木の空損、節や枝が多く難があるためであり、そして松中より大河に出ず、名を佐波川という、木津より海に至るまで七里、水浅き故に柱流下せず、よって川を関て水を湛えるなり。七里の間、新たに河を掘り江海に通ず。（現代の天満宮裏山新幹線下か・迫

戸・天満宮前を流れる佐波川を新橋（泥江）河口の直線に）。四月上旬より七月上旬に至り関水の間、手足爛壊し、身力悉くついえ尽くしおわんぬ（この沿養施設として各地に石風呂を設ける）。そして袖中に三百町の（木引峠など）林道を設けること、国中の藤葛が払底し筏組みが出来ない事、木津の水が浅く船四艘を柱の元末（両端）に付けて浮かせるなど工夫などの妙術を尽くし」と、と記しています。

こうした当事の徳地柚の事業について具体的に記録されたものは多くはありませんが、堀村地名の考に「この村に二つの大河あり。東を島地川、西を本川、佐波川とよび、尾蔵淵にて出会う。そしてこの兩岸には古木、大木が枝を差し交して繁茂して空を見ることあたはず、両川の源に朝発つ雲ここにて出会う」として後に出雲合社、出雲村などと呼ばれる村名を示唆しています。そして古くから防府・石見を結ぶ石州街道が佐波川に沿い、福川など周南から山口、萩を結ぶ街道交差の地点で徳地の玄関口に当るところです。従ってここには三坂・周防二の宮の名社、重源上人が慕う行基菩薩の開いた西方寺、西には天武天皇勅願望といわれる周防国狗留孫山金徳寺、東方にはるかに聖徳太子創建の清涼時の霊峰が望まれ、今、合流する渺茫たる大河はこれ今から始まる東大寺木材運送の基地として心強いものに至ったのではないのでしょうか。

東大寺柱の峠越し

「三谷三里は四里くさい」ともいわれる三谷村は三谷川を中心にひらけた村で、その険しい東西の山の中腹にまで丹念に築きあげられた三谷の石垣の棚田は有名です。

この村の奥谷から梶畑へ越す奥谷峠は通称一升峠とよばれ一升ほどの焙豆を食べながらこの峠を越したところからの名といえます。

治承四（一一八六）年十二月平家の南都の焼き討ちで焼失した東大

寺再興のために勧進俊乗房重源上人が大仏殿の大柱を梶畑から伐出したとき、大きなろくろ二台と一本の長さが百五十メートルである大綱二本を使つて梶畑の大柱をこの峠の頂上に引き上げて、そこから三谷川に落とし、その前に落とされた大柱の力を利用して他の大柱を次々と引き上げると云う、いわばつるべ式とも云える雄大な構想を実現された場所です。しかしこの大事業のすべてが順風満帆とは行かなかつたといえます。

三谷川側の山麓に築かれた木材の激突を防ぐための大きな土の山に、最初に落とした試木は九尺あまりもこれに突きさつたというし、或る日轆轤の具合が悪く日没にかかつたとき、重源上人は一人この峠に立ち、沈む夕日を扇で招きあげられたといえます。またこの峠で伐られた試木の杉の大株からは何本もの芽が吹き出して、いくら伐つても枯れず、これに困つた村人はこの大株に火を焚いて枯らしたと伝えられています。

また三谷村の古老のおっしゃるには、今でも木材の長さを〇丈〇尺の単位で呼ぶところですが、ここでは重源上人が東大寺柱を峠越しさせたとき出た犠牲者の数でいうのだそうです。

重源上人は柚事業の安全と成功を祈願して各地の拠点となつた地方でも伐初め、飯のまつり、そして三島神社（森林安菩薩）の勧詣などを行なわれました。

引谷村では飯の山で、船路村の大月では百杯岩と呼ばれる大岩で多くの椀形の窪みのある岩に粥を盛られたといい、当事すでに六十歳半ばを越えられた上人の牛や馬をつなぐたと云う牛立て岩、馬立て岩がどのような険しい場所にも存在します。また、急坂を登られるとき足が滑らないように道の左右の小さな木を縄状に縛つたものを手繰りながら登つたと云う異種同株の大木が山の神として残っています。

（編者のウェブページ <http://ankei.jp>）

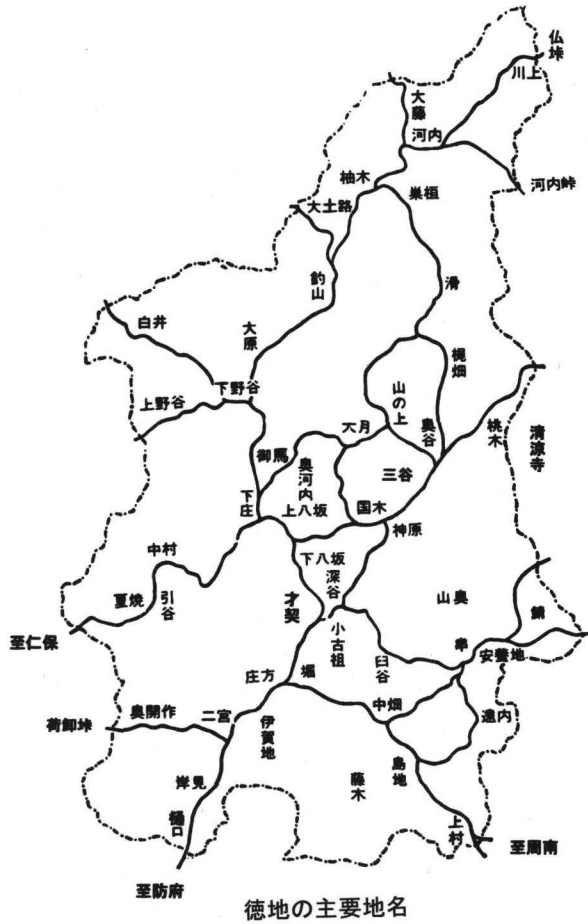


図1 山口市徳地の地図



写真2 三谷の石垣と聖岩（ひじりいわ）



写真1 重源上人の足跡を示す赤木森さん



写真6 七はぎの着物

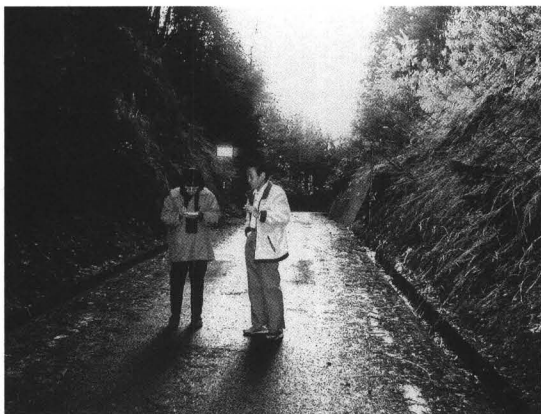


写真3 仏峠にて

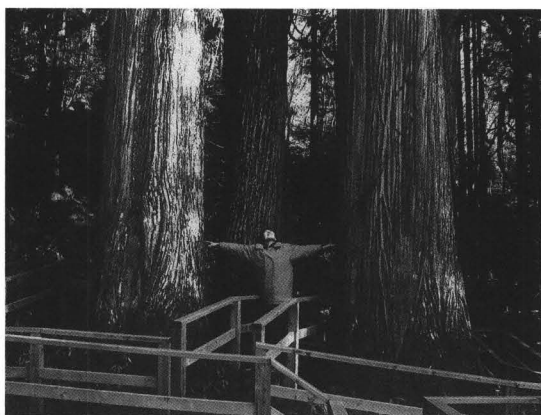


写真7 三本杉



写真4 仏峠周辺の森



写真8 小古祖の「みょうと岩」



写真5 梶畑の袈裟岩様

Exploration into the Local History and Folklore of Tokuji, Yamaguchi: Oral Traditions by Mr. AKAGI Hayashi (2)

Yuji ANKEI

(Yamaguchi Prefectural University)

Takako ANKEI

(Yamaguchi University, Part-time lecturer)

Mr. AKAGI Hayashi, an eminent storyteller of Tokuji, passed away on the 30th of November 2005. This article introduces his narratives recorded in 2004 about the local history and folkloric traditions in Tokuji District, northern Yamaguchi City.

Part 1 is a record of our visit to locations of historical interests, guided by Mr. Akagi. He showed us the places where Saint Chogen (1121-1206) performed his Herculean work to collect timber to reconstruct Todaiji Temple in Nara.

Part 2 deals with the folklore of Tokuji: festivals, daily food, and encounters with mythical or extinct creatures, a golden kite, a white pheasant, serpents, and wolves.

Part 3 is an extract of Mr. Akagi's manuscripts. We have chosen his biographical writings. He was raised in a family of *soma* or professional forest workers, who felled trees, sawed wood, and made rafts to flow down the Saba River. His house is located on the riverbank, and his family members have voluntarily undertaken the task of looking after passengers, who crossed the big river on a narrow wooden bridge. They are proud of the result that they have saved dozens of human lives from drowning.

(Yuji ANKEI, anthropologist, Takako ANKEI, ecologist)